グラディエイター

蒼月朱空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
グラディエイター

【Ｎコード】
Ｎ０４５６Ａ

【作者名】
蒼月朱空

【あらすじ】
帝都に小さな剣闘士がいた。腰に細身の剣、体には軽鎧を着けていて金色の髪と碧い瞳を持っていた。これはそんな小さな剣闘士が、英雄王を追い掛け、そしてほんの小さな英雄になる物語――

プロローグ

人の心にあるのはいつも虚無。

その穴を埋めるために人は皆、何かを求める。

ある者は名誉を。

ある者は力を。

ある者は悦びを。

ここは、そんな者たちが集まる場所。

その者たちはこう呼ばれる。

”グラディエイター”と。

プロローグ（後書き）

この作品に興味をもった方は、続き読んで下さ～い

小さな剣士

帝都にある、円形の大きな建物に沢山の腕に覚えのある者達が集まってきている。
――――ギィンッ！！――――ガキィッッ！！剣と剣がぶつかり合う音。
この建物の中心、ここで行なわれているのは闘いという名の殺し合い。
僕は今、ここで闘っている。命を賭けて。
「はっ！どうした！？さっきから剣を受けているだけじゃないか？」

「……」
目の前の敵を殺せばいい。
それがここでのルール……なのに何を迷っている？殺さなければ殺される。
なら、答えは決まっている。
ザシュッ……！！一瞬で、躊躇なく。
相手の首に斬り付けた。
（これで…いい…。
）…イヤな事を思い出す。
小さい頃に犯した罪。気付いた時には血に塗れていた。ツライ、認めたくない過去。
「君が悪い…僕に闘いを挑むから…」
僕は息のない人型のモノにそう言った。
自分のした事への言い訳の様に。
――闘いを終えた僕は控え室に戻った。
椅子に腰掛けると、急に後ろから声をかけられた。
「初めての闘いにしては、すごいじゃない？」

「それはどうも…」

声の主は若い、綺麗な女性だった。僕は彼女に対して控えめにそう答えた。
「つれない返事ね…」
「普通はそうだろう？貴女はどうも他人に対して軽すぎる。」
彼女の隣にいた男の人がそう言った。彼女は不機嫌そうにしていた。
「いいじゃない、そのくらい。アナタは細かい事を気にしすぎよ。」

「貴女が大雑把すぎるだけだ。」
僕は二人のやりとりをただじっと見ていた。
「あの…それで何か僕に用ですか？」
僕は人見知りする性格だ。
はっきり言って、彼女達を放って立ち去って行ってもよかったのだが、そういう訳にもいかないだろう。普通は。
「ああ、ごめん。実は、少し君に興味あってね。いつでもいいから今度闘ってくれない、私とさ？」
…この人は一体何なんだ？性格も発言もぶっ飛んでる。
初めて会う人間に馴れ馴れしく闘ってくれと言う。
いろんな意味ですごいな、この人は。
「どうしたの？」
驚き、惚けていた僕に彼女は言葉をかける。
「それでどっちなの？イエスか、ノーか？」

「あっ……」
更に、少しパニくっている僕に顔を近付ける。
「…ふぅ、まあいいわ。また今度会った時に返事をしてもらう事にする」
そう言って彼女は僕に背を向けた。
「それじゃあね。」
顔だけを僕の方に向けて手を振り、去っていった。

「はぁ…疲れたな、今日は…」
宿に戻り、僕は自分の部屋に入りベットに腰掛けた少し思い返してみた。
何故、僕はここでこんな事をしているのだろうと。
――人を探して。
僕に剣を教えてくれ、道を正してくれた人を。
その人がここにいると聞いて、いてもたってもいられないからここに来て。
でも、それは噂だけでしかない。
彼がここにいるとは限らないそれでも、少しの可能性があるなら僕はそれにすがってみようと思う――
「ふ……ぁ…」
む…いかん。なんだか急にすっごく睡魔が…
「ダメだ……。もう無理……。おやすみぃ……」
目蓋が重くなり、意識が遠退いていく感覚を感じた…◆　◆　◆　◆　◆暗闇の中、小さな子供が一人立ちすくんでいた。
すごく暗い、光が一筋もないこの空間でその子供が僕だとすぐにわかった。
急に景色が変わる。
あかい、あかい、真っ赤な景色に。
その子供も真っ赤になっていた。
その赤いモノが、僕には何かわかっていた。
昔、そして今でもよく目にするモノ。
その赤いモノの正体は”血”――そう悟った瞬間、ニヤリ、と悪意に満ちた様な微笑をした目の前の子供。
その真っ赤な手が僕の顔に触れるのを感じた。
小さく、ひどくかすれた声が聞こえた。
ただ一言、”償え”と。
過去に人を、沢山の人を殺した、その償いをしろというのか?……

コレは悪い夢だ。
僕の弱い心が作った、最低の悪夢――◆　◆　◆　◆　◆

◆

「ん…、ぅ……」
目が覚めた時にはもう夕方だった。
二、三時間ぐらい寝ていたらしい。
悪い夢を見ていた。ひどく気分が悪い最悪の目覚めだ、と心の中で吐き捨てる。
「外の空気でも吸ってくるかな…」
こんな時には外に出て、気でも紛らわそうそう思い、すぐに外出の用意をして街中へと出ていった。
街は賑わっていた。
僕が今いる場所は中心街なのだからだろうが、こんな時間の割には結構な賑わいだ。
特にパン屋の前には人だかりができている。
「……ん？」
どうやらあの人だかりは普通ではなさそうだ。
店の前には二人、屈強そうな男がいた。
そしてその二人の前には一人の少女がいた。
その様子を見るかぎり、もめているようだ。
「やれやれ…」
どこにいてもこういう輩が後を絶たないものだな、と溜め息をつきながら思う。
その人だかりを掻き分け、もめている現場へとむかった。
「うっせーんだよ！！このガキッ！！」
小さな少女が突き飛ばされる。
「他のお客さんの迷惑になります、だと！？」
少女は負けじと声を上げて言う。
「あなた達が文句をつけたり、周りの人達を睨んだりしているから注意しただけです！」

「もう我慢できねぇ！！ぶっ殺す！！」
男は背中に背負った金棒を振り下ろそうとした。
その時には僕は男と少女の間に割り込んでいた。
ガァンッッ！！金棒と剣がぶつかり合う音が鳴り響いた。
「っ……！！」
ある程度の衝撃は覚悟していたが、やはり重い。
「なんだ…テメェ！？」
その二人組は遠くから見た時よりも悪い顔つきだった。
「別に…ただの通りすがりさ…」
さて、コイツ等をどうしたものか。…面倒だが仕方ない。
「今から少し、猶予をやろう。死にたくなければ、ここから立ち去れ。」
とりあえず、脅してみた。当然、自分より大きな相手に効果があるはずがなく、
「ハァ？何言ってんだ、このガキ！？」
…この結果だ。馬鹿な真似をした。
「ムカつくガキだな！！テメェもぶっ殺す！！」
再び、大きな金棒が振り下ろされる。
だが、その金棒が振り下ろされるよりも速く、僕は相手の懐中へと飛び込んだ。
ドッ……！！男の鳩尾に思いっきり剣の柄をぶち当てた。
男は悶えながら後ろに仰け反った。
そして直ぐ様、鞘のつけた剣で殴り気絶させた。
「く…くそ！覚えてやがれ！！」
もう一人の男が、お約束のセリフと共に倒れている男を担ぎ、逃げていった。
「大丈夫かい？」
僕より頭一コ分ぐらい小さい、エプロンをつけた少女の方へ向いて聞いた。

「あ…は、ハイ」
怪我は無いみたいだ。無事らしい。
「よかった。…それじゃあ。」
面倒になる前――実際、もう充分に面倒だったが――と、思って早くここから立ち去ろうとした時だった。
小さな少女が年相当の高く、大きな声で僕に声をかけてきた。
「あ…あの！！」
……面倒な事になりそうだ。
僕の直感がそう言っていた。
ふぅ、と溜め息をついて彼女の方をもう一度向いた。その少女はこう言った。
「私の店に来てくれませんか？お礼がしたいんです。」
どうにも頼まれると断れない自分の性格。
……しょうがない。彼女の申し出を受けてやるか。
「…わかった。」
――そういうわけで、僕は彼女のパン屋に入る事になった。
店の中には沢山のパンが並んでいた。
どれもおいしそうだ。
パンの焼けた、とてもいい匂いが店中にたちこめる。
パン好きな僕にとって、これほどいい事は無い。内心、すっごく嬉しい。
「えっと…その…」
少女が僕の方に向かって何か言いたそうにしているので、なんだい？と言う風にして、彼女の方を見やる。
「お名前…なんて言うんですか？」
あ…うん、そうだった。そういや名前を名乗っていなかった。
「ん…ああ。僕の名前はリア。リア・ハルスレット。」
それが、僕の名前。
もうこの世にはいない、僕の両親がつけてくれた名前――
「…リアさん？」

（……）
「リアさんッ！！！」
「うわっ！！？」
（ビックリしたぁ～～。
）急に大きな声を出されたから、僕は驚き慌てふためいた。
「な…ん…？」

「どうしたんですか？急にボーとして…」
――また、みたいだ。
また、あの時を思い出していた。
あの、忘れられない時の事を。
僕が犯した罪の事を一時の感情で動いた、してはいけない過ちを――
◆　◆　◆　◆　◆
「父さんっ…母さんっ…」
そこには一人。
血を被り火傷を腕に負った、慟哭の声をあげる、幼き子供がいるだけだった。
山の中の小さな村――ここで、仕事の無い傭兵達が山賊まがいの行為をした。
もちろん村は滅んだ。
生存者は、誰もいない。
――ただ一人を除いて。
その者の碧い色をした透き通るような瞳に、ドス黒い負の感情が浮かんでいた。
「……してやる」
その感情とは――殺意。
「殺してやる！！父さんや母さん、村の皆をこんなにした奴等を！！！」
短剣を手にし、ゆっくりと立ち上がった。

その目からは、涙が流れていた。
頬についた、血に混じりながら――夕暮れ。
赤く染まる空。
主のいない朽ちた古城。
そして、百にも満たない数の傭兵達。
その中の一人が高らかに声を上げ、笑っていた。
「ハハハハハッ！！傭兵業より、こちらの方がいいものだな！」
声の主は2メートルを越える鍛え上げられた巨躯、背にはその体よりも長く大きい戦斧を持った、髭を生やした中年の戦士だった。
その者の傍らには、シャムシールと呼ばれる緩くカーブした刀身と逆に曲がった柄を持つ曲刀を両腰に携える、長身の青年がいた。
「お言葉ですが団長。我らがやった事は賊と同じ…」

「黙れッ！！貴様も同罪だ！それとも私に指図するかッ！！」

「そんなつもりでは…」
「ならば、黙っていろ！この斧の餌食になりたくなければなっ！」

「くっ……」
双剣の剣士は押し黙った。右手が剣の柄を握り、震えている。
「少し…外に出てきます…」
今いた部屋を出、外へと続く廊下を歩いた。
「ゲスが……！」
彼はその道中、そう小さく呟いた。
「て、敵襲っ！！」
外で煙草をくゆらせながら景色を見ていた双剣の剣士の耳にその声が聞こえた。走る仲間に声をかけた。
「……何事だ？」

「あっ、副隊長殿！」

「この様子を見るかぎり、ただ事ではねぇみたいだな」
「はい…、どうやらこの少しの間に二、三十人はやられたそうです」
「へぇ…」
ニヤニヤと口元を歪める彼は、何処か楽しそうだった。
「副隊長……！？こんな時に何笑って……」
「そう言うな。あのゲス野郎をこの混乱に乗じて殺れると思うと、楽しみで仕方ねぇんだよ。」
「副たぃっ…！！？」
部下の引き止めようとする声も聞かず、彼は廊下を駆け抜けた。
「ぐぅぉぉぉぉっ！？」
大きな巨体が倒れる。
対峙するは、先程彼を殺そうと駆け出した青年ではなくただの小さな子供だ。
「私が……貴様のような子供に…負けるというのか……！？」
「チッ……。もう殺られやがったか。」
そこに双剣の青年が現れた
「殺ス……」
彼の目の前にいた子供が、ただ一言だけそう言い、彼に向かっていった。
「速い……！」
彼は腰にさげた双剣を抜き放ち、相手の剣撃を受け止めた。
（まるで……獣だな。
）その子供の風貌を見て、思う。
血や土ボコリで汚れた身なり、その動き。獣と言うにふさわしい。

「だが、獣相手なら殺られるワケがねぇ！」
自分よりはるかに小さな相手を吹き飛ばそうと力を込めた。
「な…に……！？」
それでも吹き飛ばない。
それだけではなく、今度は押されている――否。
気圧されている。
（マズイ……！？）次の瞬間には、彼の体は切り裂かれていた。
コツコツという足音が廊下に響く。
脚を包むグリーブが鳴らす独特の音。
「聞いた通りといえ…、ここまでとは…な。」
周りの惨状を見て、呟く一つの人影。彼は大広間の扉を開いた。
「……っ！」
まだ、新しい血の匂いが広間を支配していた。
広間の中央には一人、幼い子供が足を抱えて座っている。
「ダレ……！？」

「名は訳あって言えない。忠告だ、今ここに神聖騎士団が向かっている」
神聖騎士団。帝国直属の最強と言われる騎士団の名前。
「このままでは、君は捕まり確実に処刑されるだろうな。」

「イヤ……」
小さく、しかしはっきりとその子供は言った。
「そうか。ならついてこい。……死にたくなければ、な。」
彼はその細い腕を引き、連れ出そうとする。しかし、それを呼び止める声があった。
「……待て。何を企んでいる？」
声の発生地は、体を切り裂かれてた双剣士からだった。
「別に、何も。」
二人が、ここから出ていく。

（……本当にか？）薄れゆく意識の中、彼は思考を巡らせる。
（ヤツは、神聖騎士団の……）外には、白い大軍がその砦を囲んでいた。
旗には翼竜の紋章が入れられている。
翼竜は、帝国のシンボルである。
ただ、その翼竜は銀色に輝いていた。それが、神聖騎士団の証だった。
「もう来ていたか……」

「ア……」
砦の入り口に立っていた二人に一つ、騎兵がこちらに近づいてきた。
兜の代わりにバンダナをつけているなど、明らかに他の兵とは違う容貌だった。
「英雄王っ！！」

「その肩書きを呼ぶな。」

英雄王と呼ばれた彼は、やってきた兵に一言言い、隣にいる子へ手を差し伸べた。

「黙っていてすまなかった。あまり人に素性を言いたくないのでな。私の名はジークフリード。……周りは”英雄王”と呼ぶがな。」

――それがリアと、リアに生き方を教えた”英雄王”との出会いだった。

◆　◆　◆　◆　◆

あの後、僕はジークに剣の扱い方を教えてもらった。
強すぎる力はある程度の力があれば暴走する事は無いと言っていた。
ジークは僕をとても大事にしてくれた。
僕はそんなジークが大好きだったのに。
何処かへ、行ってしまった。
僕のそばからいなくなった。
だから、ジークを探すために街に降りた。
……ここで情報を集めても、ジークは何処か遠くに行っているに違いないだろうけど。
僕は……ジークを絶対に見つけだす。
そして聞く、何故騎士団を、僕を捨てていったんだと。
もし、なんでもなかったのなら、僕はジークを許さない。絶対に……

小さな剣士（後書き）

関係無いですがアジカンいいっスね～。まだまだ続きますが、御感想あれば下さい～

"英雄王"の面影

とりあえずパンをいっぱいもらい、宿に戻ろうと思ったが、その前に闘技場の様子でも見ていこうと寄っていこうと中に入っていった時だった。
――ワァァァァッ！！響き渡るかのように、観客たちの歓声が起きた。
僕は闘い合っている二人を見た。
（――え！？）似ていた。
（ジーク……！？）風貌は荒々しく、ジークとは全く違うが、顔つきやその雰囲気はまるでジークそのもののように思えた。
「あのっ！今闘っている…あの大きな剣を持った剣士の名前、わかりますか！？」
僕は近くにいた人に聞いた。慌てていたみたいで多少早口になってしまった。
「ああ、アイツか。アイツの名はシオン。セカンドネームは無いみたいだよ。」
シオン――。
その名前が僕の心に響いた。
僕は何故か確信していた。
彼はジーク……もし違っていても関係がある、と。
――オォォォォッ！！今度は咆こうのような声がコロシアムに響き渡る。
シオンという名の剣士から発せられていた。
力の差は圧倒的だった。
相手の太刀を全て受け流し、シオンは相手の鎧ごと体を砕いた。
その一撃で闘いは終わった。
シオンはまだ物足りなさそうに一、二度空を切ったがすぐに剣を背に抱えた鞘に納め、控え室へと続く通路へ向かっていった僕はその

彼の姿を追った。
ロビーに戻り、そこから控え室に続く廊下で。彼はいた。
「シオンッ！」
一度も言ったことのない名前を呼ぶのは抵抗があった。
胸が、緊張で高鳴っていた。
初めて会う相手に呼び捨てで声をかけたのを後悔してもいた。
「誰だ、テメェ？」
振り返ったシオンのその鋭い眼光を放つ緑の瞳に僕は一瞬、背筋が凍るような感じがした。
「僕はリア。君に少し聞きたい事があるんだ。」

「へェ…。それで？お前みたいな子供が俺に何の用だ？」
シオンは何故か楽しそうにしていた。
言葉遣いも少し、ほんの少しだが柔らかくなった気がする。僕は、彼に問うた。
「君は……ジークなのか？」

「……かの”英雄王”サマの名前か。他人の空似だな。俺はアイツによく似ているって言われるが全然違ぇ存在だ。」

「でも……」
そう言った瞬間、顔に風が当たるのを感じた。彼の大きな剣が目の前にあった。
「でももクソもねぇよ。俺の名はシオン。ただそれだけの存在だ。」
シオンは剣を持ったまま僕の横を通り過ぎようとしたが、誰かが彼を呼び止めた。彼は振り返る
「ナズナ……それにハギか。」

「シオン、そんな小さな子にそんな態度はないんじゃない？」

「久しぶりに貴女と考えが同じだ。」
確か彼女らは今日会った……そういや名前聞かなかった。
えーと、彼女がナズナで彼がハギかな……？
「それに私は薺［なずな］。ちょっとイントネーションが違うよ。
萩［はぎ］もね。」

「そんな事どーでもいいンだよ。なんの用だ、ナズナ？」
僕にはシオンが少し機嫌が悪そうに見えた。
というか、昔の恋人に会ったような、そんな感じだった。
「んっとね、どっちかというとリア君に用があるんだけど……」
彼女の視線がこちらに向けられた。
「ねぇ？リア君。前の時に名前言い忘れてたね。私の名前は薺［なずな］。そしてこっちが私の式神の萩［はぎ］。」
はぁ、と曖昧な返事をする自分。……ん？式神？
「あの…、式神って……？」

「あ、こっちじゃ聞かない言葉だよね。式神っていうのは、私がいた国特有の”術”っていうので生み出される存在のコト。幽霊みたいなものもあれば萩みたいに人みたいな身体をもったのもいるよ。」
薺さんは親切に教えてくれた。
初めて会った時は変わった人だと思っていたがいい人そうだ。
「……用はそれだけですか？」

「まっさか。もう一個。明日、私と闘ってよ。君さえよければ、だけどね。」
彼女は前に聞いた時のような笑顔で僕に聞いてきた。
明日、僕には用事はない。答えはひとつだった。
「わかりました、明日ですね。僕が手続きしておきます。」

「ありがとう。お願いね、リア君。」

「あと、”君”付けはやめて下さい。あまり”君”付けで呼ばれるの、慣れていませんから。」
「了〜解。じゃあ、私のことも薺って呼んで？片方が呼び捨てなんてフェアじゃないでしょ？」
「そうですね。……それじゃあ薺、また明日に。」
「また明日ね、リア。」
薺と萩(さん)はロビーへと向かっていき、外に出ていった。
ここに残るのは僕と、シオンだけだった。
「オイ。」
シオンがぶっきらぼうに僕を呼んだ。
「お前はジーク・フリードの事を探してるみてぇだな？」
シオンの問いに、僕は答える。
「ああ。」
「諦めろ。」
「何っ……！」

「アイツの事を追い掛ければ、必ずお前は後悔するだろうよ……」

シオンは背を向けて歩いていった。
その背中は、どことなくジークに似ていた。

"英雄王"の面影（後書き）

これを読んでくれた人たちにお願いがあります。アドバイスや評価などをしてほしいです。この作品をもっともっとレベルアップさせたいので、そうしてもらえると嬉しいです。なんかさっきからデスマス口調です。

大いなる力の片鱗

――半月が光る夜。
僕は宿にいた。
ベッドに腰掛けている。
シャワーはもう浴びた。
どうせ明日の朝も浴びるけど。
窓の外を見た。半分だけの月だが十分綺麗だ。僕は物思いに更けていた。
「そういや、薺はシオンと知り合いみたいだったな。それに、シオンはジークの事を何か知っているみたいだった。」
僕はたまに、独り言を言っている時がある。
直そうと思うが、癖なもので中々直らない。
たまに言っている時に他人に横切られると恥ずかしいんだ、これが。
「明日の為にもう寝ようかな……」
僕はベッドに横たわった。……寝付けん！
「むぅ～、どうしたものかなぁ……」
しばらく考えた結果、夜の街をうろつくことにした。
宿の外に出るとヒヤリ、とした冷たい風が肌に当たった。
僕は部屋から持ってきた毛皮のコートを纏った。
「まずは……何処に行こうかな？」
僕は行くあてもなく夜の街をさまよった。
・・・・・そして今、僕は裏路地にて大柄の男たちにからまれている。情けない事に。
「よぅ、ボウズ。こんな所で何してんだぁ？ん？嬢チャンか？」

「いんや、男だろ？確かにわかんねぇなぁ。」
こいつら、確か夕方にパン屋の前でもめていたか奴らだ！かなり酔っているみたいであっちは気付いてないみたいだが。

僕がどう対処しようかと考えていると、彼らの後ろから一つの人影が近づいてきた。

「そんなことはどっちでもいい。もとがこれだけ良ければ、人売りも高い金を出すだろうさ。」

長身の、眼鏡をかけた男だった。目付きの悪い、いかにも頭のキレそうな悪者っていう感じの人だ。

「おい、皆出てこい。このガキ、捕まえるぞ。」

路地の間からワラワラと男たちが出てくる。数は二、三十人といったところか。

これは多いな。

とりあえず、場所を変えなくては。

こんなにも狭いと剣を振り回すことだって出来やしない。

そう結論づけ、僕は振り返り脱兎のごとく駆け出した。――が。

「おいおい。逃げさせやしないぜぇ？」

その方向にも、男たちはいた。――マズイ、と心の中で毒づく。

左右は壁、前後は僕を捕まえようとする男たち。逃げ道は無い。

《まったく、情けない事だ。こんな者たちに手間取らされるとは。》

そんな時、頭の中に話し掛けてくるような感覚がよぎった。すごく気分が悪くなった。目の前がふらつく。

「お、おいっ……！」

なんだろう？周りの男たちがざわついている。
ゴキ、グキリという変な音が聞こえる。
体が熱い。意識がどんどん薄れていく。

モウ何モ、考エラレナク……ナッテキタ……！？

「コイツは……！？」

プツリ、と意識が途切れた。

「グオオォォォォォッ！！」

それに取って代わるように、化け物のような叫び声がこだました。

――次の朝、この街の路地裏にて数十人の死体が発見された。

それらには全て、剣傷が付けられていた。

大いなる力の片鱗（後書き）

今回は短めだにゃ～。そりゃ授業中にやってたらなぁ～。それにしてもこの作品、みんなにちゃんと読まれてるのかと心配になってきた。いよっし、もっと有名になる為ガンバルぞー！

何ノ為ニ剣ヲ振ルウ？

――いったい、僕は何をしていたのだろう？気が付けば宿の前に倒れていた。
男たちに囲まれた辺りから記憶がさっぱりとない。
（――ダメだ。
何も思い出せない。
）体には何も異常は感じられない。
大丈夫、今日の薺との闘いには支障はない。
ただちょっと気分がすぐれないが。
僕は街の北方にある時計塔を見た。
現在、午前十一時。薺との試合まであと一時間ほどある。
「シャワー、浴びるかな……」
宿の中に入り自分の部屋に戻る。
乱雑に着ているものを脱ぎ、個室の浴場へと向かう。
シャーーーー……シャワーを浴び終え、体を拭き、乾かして服を着ようとすると不意に鏡が目に入った。
鏡に映るは自分。でも、今の僕は僕でない気がする。
「僕はいったい……なんなのだろ…う！？」
急に頭が痛くなった。
体の中で何かが逆流するような、そんな感じが襲ってきた。
覚えのない記憶が、フラッシュバックする。
「何だ…、アレは……！？」
その光景は残酷だった。
男たちがどんどん息絶えていく。
細切れにされる者もいる。
男たちはみな、恐怖と絶望に満ちた顔をしている。
そしてその惨劇の中心にいるモノは――
「アレは……僕！？」

その姿は、まさしく僕のものだった。
だが、違う。
髪は地に着くほど長く。
背中ではばたくのは黒い天使の持つような翼。
四肢は白い異形の手足に。
その形は人を保っていた。
今の僕と同じ顔をしたその”人でなき人”は、笑っていた。
「ハァ……ハァ……」
頭痛がおさまってきた。
幻覚も見えなくなった。
大丈夫だ。体はちゃんと動く。ただ、頭の中がしばらく真っ白になっていた。
「あ……そうだ…、行かなきゃ……闘技場に……」
僕は走りだしていた。
心ココニ在ラズ、今の僕はそんな感じだった。
闘技場に着くまでに何度も転んだ。
体中がすり傷ばかりになっていく。
何故こんなにも転んでいるのかわからない。
ワカラナイ。闘技場に着き、ロビーに入ると薺がいた。
「遅い！」
彼女は腰に手をあて、僕を待っていた。怒った顔をして、僕に詰め寄ってきた
「君…、私と闘うつもりあるの！？」
彼女がこんなにも怒るのは当然だ。だけど、今は僕は……
「すみません……。でも、僕はあなたと闘いたくない……」
もしさっき見たあの異形の姿をした僕が出てきたら――僕は、彼女を殺してしまうかもしれない。
「あなたは、いい人みたいだから……傷つけたくない……」
自分が、恐い。
そう思ったのは初めてだった。

あの化け物、それが僕の中にいると思うと、取り乱してしまうほど恐かった。
今度あの化け物が出てきたら、もう元の自分には戻れない気がした。
「……もう、怒ったわよ。」
薺が小さくそう言ったのが聞こえた。
「傷つけたくないですって？冗談言わないで！私は君にそう思われるほど弱くなんてない！私をなめているの！？」
薺の怒声は、僕を我に返らせるのに十分だった。
「リア、早く行くわよ。そんな余裕も見せられないようにしてあげるから！」
薺は、スタスタと武舞台の方へ早足でむかっていった。
「やれやれ。薺も困ったものだな。」
隣にいた萩さんが、溜息混じりに言った。
「しかし、君も悪い。あのような事を言われ、怒らない者もそうはいないぞ。」
彼はほほえむ様に僕に向かってそう言った。
そして薺の後を追うように歩いて行った。
――ワァァァァァ！！　暗い通路を抜けると、太陽の明るい光、地を揺るがすような歓声が僕を包んだ。
武舞台を見ると、薺と萩さんの二人が立っていた。
「いくわよ…、萩。」

「ああ。」
萩さんの姿が揺らいだ。次の瞬間には薺の手に、一本の槍が収められていた。
「名槍・萩月。これが萩の正体よ。」
月の様に輝く色の穂先はなだらかな流線型を描いており、その形は鋭く長く、そして美しい。
武舞台に上がった僕を、薺は真っすぐに見据えた。
「さあ、闘いましょう。リア！」

彼女は槍を前に突き出し、突進してきた。
僕は身を半回転させ、それをかわした。
「本気でやらなきゃ、死ぬわよ？」
さらに追撃を重ねてくる。
剣では槍と相性が悪い。
何せリーチの差がありすぎる。
攻撃を受け流す、という手もあるが、僕の剣の技術ではそれは難しい。
「くっ……！」
それに彼女の闘いの技術もたいしたものだった。
ただの連続の突きも一撃一撃が重く、正確にこちらの急所や腕、足を狙ってきている。
金属と金属が打ち鳴らす音が、何度も何度も鳴り響く。激しい攻防の中、薺が口を開いた。
「流石ね…。だけど、これで終わりよっ！」
薺は力を込めた一撃で僕の顔面を狙ってきた。
それをなんとか紙一重でかわせたが……
「甘いっ！」
彼女の持つ槍、”萩月”が生き物の様に曲がりくねり、僕の横腹を貫いた。
「ぐっ……！？」
激痛が走った。貫かれた部分が熱くなる。
「言ったはずよ。萩は式神だって。」
彼女は距離をとって、槍を構え直した。僕も痛みに耐えて剣を構え直した。
「その傷でまだやるの？……少なくとも今は闘う気があるようね。」
確かに血はとめどなく出、体はフラフラする。
剣を持つ手は震えている始末だ。
そんな時、ふと思う。
（僕は、何の為に闘っているんだろう……？）目が少し霞んできた。

血を流しすぎたのだろう、体がだるい。
（何で……？）霞んだ目に、薺がまさに今、僕に槍を突き刺そうとする姿が映った。だが、彼女はそれを止めた。
「君は何の為に闘っているの？」
僕が考えていた事と同じ事を彼女は聞いた。
「僕の……闘う理由……」
すぐに思い浮かばなかった。
ジークを追い掛ける為に闘ってきたはずだ。
たが、今はそんな気がしない。今、僕が闘っている意味。それは何なんだろうか？
「昔、シオンに同じ事を聞いた事があるわ。答えは単純だった。『闘いたいから闘っている』だって。驚きと呆れでしばらく何も言えなかったわ」
シオンらしいな、と思った。
ジークなら、もっと気高く、カッコイイ事を言っていただろうに。
ジークといた頃の僕なら、
「ジークがいるから」
と言っていただろう。
「ああ……、そうか……」
何故、僕がジークを探そうとしているのかわかった気がする。
僕が闘う理由――いや、生きる意味が欲しかったからだ。
今まではジークがいたから生きてきた。
生きられた。
だけどジークがいない今、僕は本当の意味で自分の道を歩まなくてはならなくなった。
恐かったんだ、一人で生きる事が。
怖れていたんだ、ジークと決別する事が。
彼のぬくもりを、ずっと感じていたいと思ってしまったんだ――
「ハハ……ハハハハハッ！」
でも、それは僕のワガママ。僕は、ジークと決別しなくちゃならな

い。
「何の為に闘っているかって……。いいよ、教えてあげるよ。」
ジークの事は諦めようと思う。
たぶん、諦められるはずがないだろうけど。
だから、別の道で彼を追い掛けようと思う。
「僕は……！」
ただ僕は、ジークに憧れていただけかもしれない。
「ジークのような、”英雄王”になる為だっ！！」
突き付けられていた槍を、手にした剣ではじく。
薺は驚き、とっさに後ろに下がった。
「何かをふっきれたみたいね……。よかったわ、本気の君と闘えそうでね。」
薺の口元に笑みが浮かぶ。
彼女の言った事は半分正解だ。
僕の中にはあの”化け物”がいる。
まだその不安だけは残っている。
でも、今の僕なら大丈夫。
そんな気がする。
（体はっ……まだ動く！！）不思議と横腹の痛みがしない。
だるさだけは残っていたが、頭の中はずいぶんクリアになっている。
いける。闘える！
「ハァァァァッ！！」
体中の力を振り絞って、剣を振りかざす。
剣撃を何度も、休み無しで打ち込んでいく。
薺の戦闘技術ならこのくらいどうでもないだろうが、今は少しの隙が欲しかった。
「しまっ……！？」
薺の体のバランスが崩れるのが目に見えた。ここしかチャンスはない。
「ここだっ！」

懐に入り込み、地にすった剣を逆袈裟に切り上げた。
ジークが得意としていた剣技の内の一つだった。
「つぅっ！！」
その剣撃は、彼女の肩を切り裂いた。
致命傷までとはいかないが、かなりの傷をつけた。
お互いに、間合いをとる。しばらくの間、動かない。
「久しぶりに…、本気を出せそうだわ。」
薺の言葉が、長い睨み合いをかき消した。
こちらもあちらも、共にかなりの傷を負っている。
次の一撃で――勝負が決まる。

「アァァァァッッ！！」

「セヤァァァァッ！！」

そして僕の意識はそこで途絶えた……

何ノ為ニ剣ヲ振ルウ？（後書き）

自己紹介文を変えようと思います。これを投稿してから一日ぐらい後に。見て下さい。俺の憧れのアノ人（誰？）について語ろうと思っていますので。ヒントは月ですね、ハイ。あと、きのこ（ア

闘いの後

「ん…ぅん……」

目覚めると、僕は見知らぬ部屋のベッドにいた。
部屋は見るかぎりすごく豪華。
僕の泊まっている宿とは似ても似つかない。

「あ、目が覚めた？」

薺が近くの一室から出てきた。
手には料理を乗せた皿があった。

「君、あれから一週間も目覚めないんだもの。正直、ちょっとやばかったかな、とか思っちゃったじゃないの。」

あれから、というのは僕と薺が闘った日の事からだろう。
にしても、そんな気が全くしない。まるで時間をブッ飛ばしたかのように。
「それで……ここは？」

「私の借り宿。というか、シオンが昔に住んでた所。彼、今は傭兵所でいているから。」
……もしかして、シオンってものすごく金持ちだったりするのか？
こんな豪華な家を持っているなんて。
「あの……。シオンって一体何者なんですか……？」

聞いてみた。

「ん～、詳しいことは言わないように口止めされているんだけど、彼は実は貴族の出なんだよね。そんな風には見えないけど。」

「ハハッ、確かにそうですね。」

僕はなんだかおかしくて笑った。

「……！」

「？　どうしたんですか？」

見ると彼女は驚いたように僕を見ていた。

「いや……。君がそんな風に笑うなんて思ってなかったから……」

「ムッ。失礼な。」

少しの静寂の後、僕と薺は大笑いした。

「うん、元気そうね。……あ、そうだ。今度シオンに会いに行きなさい。何か聞きたがっていたでしょ、君？アイツを説得しておいてあげるから。」

「あ、ありがとうございます……」

まさか、こんな事を言ってくるとは思わなかったので返事がだいぶぎこちなくなった。

「んじゃ、私はちょっとヤボ用があるからさ。昼食はそこに置いておくから。といっても私の食べ残しみたいになっちゃったけど。」

彼女は料理を超速で半分食い、バタバタしながらドアに向かった。

「あ！ちょっと……」

時すでに遅し。彼女は外へと出ていってしまった。

「色々と聞こうと思ったんだけど……ま、いいか。」

身体が完治すれば、シオンに話を聞けるんだし、今はじっくりと身体を治す事に専念しよう。

実際、身体が完治したのは予想よりもはるかに早い、一週間後の事だったのだが。

闘いの後（後書き）

最近、魔法学園アヴィリオンをやり始めました！ロークという名のミスティックなので、やっている人は連れていってください！レベルすげー低いですけど（汗

傭兵所にて

「ここが、シオンのいる傭兵所かな……？」
街の南方にある、小さな建物。
薺さんに教えてもらったとうりに来たので間違えているハズはないと思うけど。
「失礼しま～す……」
そう言ってドアを引いたが開かなかった。
「あれ……？」
よく見ると、把手の上の方に『押す』と書いてあった。
恥ずかしくなり、頬が熱くなるのを感じた。
キョロキョロと周りを見渡す。
誰も見ていないといいんだけど。
気を落ち着かしてドアを『押し』た。
中は人でいっぱいだった。
見た目は酒場で、賑わっている。
屈強そうな戦士風の男から旅の巡礼をしていそうな女性の神官などまでいた。
そんな光景をしばらく見ていた僕に話し掛ける声。
「よう、リア。とりあえずこっちに来いよ。」
カウンターの前の椅子に腰掛けていたシオンが、僕を手招いた。僕は彼の隣に座った。
「ナズナがうるせーからよ。話、してやるよ。」
シオンはどっしりと構えて、僕をじっと見た。
何でも聞いてやる、という感じだ。だから聞いてみる。
「ねぇ…、シオンはジークの事何か知っているの？」

「……ああ、よ～く知ってるぜ。」
シオンが口を開く。

「リア、お前は今アイツが何処にいて、何をしていると思うんだ？」
いろいろと思い浮かべて、それを言葉として出してみる。
「えっと……。何処かで隠居生活をしているとか、女の人とカケオチしたとか、あと神聖騎士団がイヤで逃げていったとか……」

「ハハッ、おもしろい事を言うんだな。でもリア、お前の本心は何て言ってる？」

シオンの言葉は、僕の心を揺さ振るのに十分な一言だった。
シオンはもしかしたら見抜いていたのか？僕の、不安を。
不意に怒りの感情が芽生える。

「シオン、君はっ……！」

「シオン！いるかっ！？」

バンッ、とドアの勢い良く開け放たれる音の後、傷ついた男たちが

店の中に入ってきた。
「急にどうした？……ヒデー傷だな。魔族にでも襲われたか？」
「魔族じゃない！あの……絶滅したハズの竜が出たんだ！」
その言葉でざわめきが起きた。
――竜。
またの呼び方を竜族という。
この世で最も誇り高く、人よりも何倍、何十倍をも上回る力と知識を持つ存在。
遥か昔、この世を統べていたという説もある。
数十年前、絶滅したと聞いていたけど……
「本当だ！信じてくれ！俺の仲間が……キセラが森に……！」
「落ち着け。キセラは俺が助けにいってやる。どの辺ではぐれたんだ？」
「森の……集落跡の近くだ……」
「よし、わかった。――オイ。行くぞ、リア。」
「え……僕？」
指名されたので驚いた。まさか僕が同行人として行くことになるのだろうか？
「何ぼうっとしてる。ついてこい。ジークフリードについてはまた後だ。とりあえず力を貸せ。」
「わ、わかった。」
そうして僕はシオンと一緒に竜の出たという森へ行く事となった。
外に出ると冷たく強い一陣の風が僕の体をうちつけ、遥か彼方へと去っていった。

傭兵所にて（後書き）

この辺から中盤です。テスト週間中に書いておりました。大冒険です。結構ヤバい状況です。ぶっちゃけた話、現実逃避かもしれません。なんか変な後書きですな。……どうしよう

人と魔族と獣人と竜と・前

僕とシオンは歩いていた。
キセラさんという人を助けに、南方にある森へ向かっている。
「ねぇ、シオン……」
「何だ？」
「何故、僕を連れていく事にしたの？」
「……アイツは傭兵所のナンバー2なんだよ。もちろん俺が一番だけどな。アイツがやられる程その竜が強いんなら、他のヤツなんて頼りにならねぇ。でも、お前は強いだろ？」
シオンはまだ少年らしさを残す笑顔でそう言った。
「そんな……僕は……そんなに自分が強いとは思わないよ。」
「でもお前は、ナズナと互角に闘りあった。俺、アイツに勝ったことないんだぜ？」
「え……？」
予想だにしない言葉だった。
「だからって俺よりも強いって勘違いするなよ？ナズナはお前と闘っていた時、手加減してたそうだったからな。本気になったアイツは、そりゃもう鬼の様に強いんだぜ。」
「鬼の様にって……」
苦笑混じりにそう答えた。シオンにはそれが呆れた風に見えたんだろう。
「冗談じゃあねぇんだけどなぁ……」

それから僕達は森に入るまで一言も話さなかった。
森に入ると不思議な感じが森中を包んでいるような、そんな感覚がした。
「この森で竜が出たのか……気を引き締めていかねぇとな。」

「そうだね……」
傭兵所で聞いたとおり、集落跡のある場所へと足を運ぶ。
警戒を怠らないようにして。
最近”魔族”と呼ばれる、人間とはまた違う人外の者たちが人々を襲うようになった。
それからというものの、野獣などの動物までもが人間を襲うようになってきた。
それは、魔族の影響だと言われている。
絶滅したはずの竜が出たというのも、魔族が関係しているのだろうか……？
「おい、リア？」
シオンが考え込んでいた僕に声をかけた。僕はハッとして彼の顔を見た。
「あっ……どうしたの、シオン？」

「それはこっちのセリフだ。ボーっとしてんなよ。着いたぜ。」
考えに夢中になって、集落跡に着いた事にも気付かなかったようだ。
「オイオイ、しっかりしてくれよ……」
僕とシオンはこの集落跡ではぐれたと言われたキセラさんを探した。
あまり広くはなかったので、すぐに見つかると思っていたのだが――
「いないね……？」

「ああ…、そうだな……。移動したんだろうな。この周辺を探そう。」

「うん、わかっ……！」
シオンの方を振り返った時だった。
向こう側の木々の内の一つに、こちらに弓矢を向けている影があった。
「シオン！後ろっ！」
シオンは振り向き、背中の大剣を抜いた。
シオンの脇にあった岩石に矢が突き刺さる。
「動くなっ！」
影が叫ぶ。
その影は僕達の目の前に降りてくる。
獣人――人を基としたような獣、人型の獣ともいえる姿をした、人間とは似て異なる者――がそこにいた。
「何者だっ！？お前達は？ここで何をしている！？」
彼は虎の様な毛並みを持っていた。
見た目こそ虎そのものだが、器用に二本足で立ち、人に近い存在だという事がわかる。
「この辺りは我ら獣人の領域！人間は去るがいい！」
「ま、待て。ここかこの辺りで女性を……人間の女を見なかったか？」
「見た……と言ったら？」
「あつかましいとは思うが、教えてほしい。」
「断る、と言ったら……？」
「力ずくでも聞くまでだ！」
シオンは虎の男に向かって駆けた。
男は腰に掛けたナタの様な剣を抜き、シオンの突撃を受け流そうと

する。
「甘いぜ！」
シオンは突き出した剣を上に掲げ、そのまま切り下ろすモーションに入る。

「チィッ！！」

男が横に体を滑らせる。
その結果、シオンの剣撃は空振りになる。

「もらったぁ！」

「ナメんなよっ！」

シオンは宙に跳んだ。
剣を支点にし、男に蹴りを食らわせる。
男が吹っ飛ぶ。

すごい。
だけど、こんな闘いは無意味だ。僕にはそう感じられた。僕は無意

識に叫んでいた。
「シオン！こんな所で闘っている場合じゃないだろう！？早くキセラさんを見つけなきゃ、いつ竜に襲われるか……」
「竜だと！？お前達、竜について何か知っているのか！？」
僕の言葉にシオンが、男が動きを止めた。二人がこちらを見る。
「え、あ……え～と……」
言葉に詰まった。するとシオンが口に笑みを浮かべ、男に話し掛けた。
「……ああ、知ってるぜ。どうやら、竜の事を知りたいらしいな。情報交換といかないか？」
「……いいだろう。ついてこい。我ら獣人の村へと案内しよう。」
男は振り返り、木々の中へと入っていく。僕とシオンは、彼の後についていった。

人と魔族と獣人と竜と・前（後書き）

ハイ、後書きです。ここからがこの作品の見せ所……つーか半分を過ぎた所です。全く関係ない話になりますが、俺は絵がド下手です。そんな訳で俺なんかの為に絵を描いてくれる上手い人を募集します！そして俺を励ましてください（！？）最近、泣きそうな状態なんですよ……。精神が不安定というか欠点課題が多いからなんですが……。まあとりあえず絵を描いてやってもいい、という人はメッセージください。でわ。

人と魔族と獣人と竜と・後

「へぇ……」
ひらけた場所に出た。
広場の中心に斜めに立った大樹があり、枝の上にいくつも家が建っている。
どうやら獣人達はこの大樹を一つの村として生活しているようだ。
獣人がどう生活しているのか全く知らなかったから、一種の感動を感じた。目移りばっかりしてしまう。
「今から長の所へ行く。失礼のないようにな。」
大樹を上に、上に登っていく。
幹の一番上らへんに大穴があった。僕達は男の先導でそこに入っていった。
「長、竜について知る人間達を連れてきました。」

「そうか……入れ。」
穴の中のドアの前で、男は頭を下げカーテンらしき布をめくり、中に入っていく。
「よく来なさった、客人よ。」
キツネの顔をした、初老の男が正座をしてそこに座っていた。
小柄の割には体付きが良く、長いあご髭が特徴的だった。
「まあ、そこに座るがいい。」
僕とシオンは彼と同じように正座で座った。虎の男は立ったままだった。
「して、お主等の名前は？」
長が聞く。だが、シオンは不敵な笑みを浮かべてこう返した。
「人に名前を聞く時は先ず自分から、ってどっかで誰かがよく言わなかったか？アンタ達から名前を言えよ。」

「貴様っ……！！」
虎の男がシオンに殴りかかろうとする。
「つっても俺はそんなの別に気にはしないからな。俺の名はシオン。こいつはリアだ。アンタ達は？」
「ほう…、中々面白い青年だな。だが、少々礼儀知らずな所がある。気を付けなされよ。」
「気分を害したのなら謝ります。すいません。」
僕は焦り、長に頭を下げた。シオンにも頭を下げさせたが。
「ハッハッハッ。別に良い。私はオロド。彼はガロンじゃ。」
ガロンという名の虎の男は腕を組んでそっぽをむいていた。
「シオン……。」

「ん？」
僕はシオンに小さい声で聞いた。
「竜の事について知っているって言っていたけど、本当？」
その事が、かなり不安だった。
「……いや。」
不安的中。
「ど～にかなるだろ。心配すんなって！」
心配になるに決まっているだろう。全く。
「さて、竜について詳しく聞いてもいいだろうか？」
オロドがかなりＢＡＤなタイミングで僕達に聞いた。
「あ、ああ。この森で俺の仲間が竜に襲われたんだ。それでその仲間の内一人が……」
そこでシオンが大きな声をあげた。
「そうだっ！キセラ！あの集落跡にいたはずの女性を知らないかっ！？」

「ああ、ガロンが見つけたあの人間の女か。彼女ならガロンの家で休んでいる。怪我をしていたが命には別状はないだろう。」

「そう…か。」

シオンは心底安心した様子だった。その顔を見て、なんだか僕もホッとした。

「……っと、話がそれてしまったな。竜の話だったっけ。」

シオンが黙り込んだ。……さて、どうやってシオンは誤魔化すんだろう？

「リア、お前何か知ってる？」

「は……！？」

僕に振るか、コノバカシオン。

後で何かねだってやる。ふぅ、と一息ついた。やれやれ、面倒だな。

「詳しくは知りませんが……、人間の間での竜についての伝承ならあります。」

「ふむ、興味深いな。我ら獣人は人間とは関わりを持たないから、そういう情報は嬉しいものだ。教えてもらおう。」

「わかりました。では……」

僕は一つ、深呼吸をして話し始めた。

「一般的に知られているのは、竜は竜族とも呼ばれている事。誇り高く、人よりも何倍、何十倍をも上回る力と知識を持つ存在だという事。そして数十年前に絶滅したと言われている事ぐらいです。」

「……やはり人と獣人とは伝えられている事に少し違いがあるようだな。」

オロドはゆっくりと口を開いた。

「先ず、竜は滅んではいない。確かに数は減ったものの、秘境や未開の地にはまだ沢山の竜がいる。だが、その力も薄れているだろう。

神に限りなく近い力を持つという、竜の力が。」
「神、か……。まんざら冗談でもねぇんだろうなぁ……。」
「勘違いはしないことだ。竜は我ら獣人に近い存在。それだけでなくお前たち人や、魔族にも同じ事が言える。」
「つまりは、この世界の主四種族、人間・魔族・獣人・竜は似ている、と？」
「しかし、異なる存在だ。少なくとも、我らとお前達はな。」
「確かにな。そうじゃなけりゃ、俺達は共存できるハズだからな。」
「フン。見た目の割にまともな事を言うんだな、お前は。」
シオンに突っ掛かるガロン。
「ンだと？」
挑発にのるシオン。
「こら、シオン。喧嘩なら後でやる。今は話の途中だよ。」
「ならお前がやっといてくれよ。もともと俺達はキセラを探しに来たんだろ？」
「全く……。わかったよ。ならシオンはキセラさんの所に行きなよ！！」
「お、怒ることはねぇだろ、怒ることは。」
つい感情的になって叫んでしまった。
僕らしくない。でもシオンが悪いんだ。僕は悪くない。うんうん。
「はぁ～、わかったよ。俺はキセラの所に行く。話が終わったらお

前も来いよ。」
シオンはガロンと一緒に部屋を出ていった。
「さて……話を戻そう。」

「はい……すいません。シオン、ちょっと沸点が低いもので……」

「こちらこそすまぬ。今のはガロンが悪い。後で謝らせよう。にしても、お主はまるであの青年の保護者の様だな。年歳の割に落ち着いていて、大人びている。」

「そんな事ありませんよ。一時の感情で動いてしまう事だって何度もありましたし……」
（そして、沢山の人を殺してしまった事だってある……）それが、僕の消えない罪に共通する事。忌まわしい過去と共にあるモノ。
「……どうやら言ってはならん事だったようだな。すまない。」

「いいえ。それより竜についての話を。」
僕は姿勢を正し、オロドを真っすぐ見据えた。

「いい目だ。お主の様な人間は嫌いではない。」

オロドが語る。

「と言っても我らの間に伝えられている伝承は、もうほとんど言ってしまったがな。後は、この森の太古の名が竜と関係があるといったところか。」

「この森が、竜と関係がある……？」

「ああ。この森の太古の名は”ドラゴンズ・パス（Ｄｒａｇｏｎｓ・Ｐａｔｈ）”。別名、”竜に続く道”と言われていたそうだ。」

「”ドラゴンズ・パス”、か……」

不思議な響きだった。

「名前には言霊というモノがある。名は体を表す、と言うだろう？その名のとおり昔、竜はこの森にいた。」

「そして絶滅したと言われる竜が復活、もしくは隠れていたか、ただ単に見つからなかったのが今になって発見された。それがオロドじ～ちゃんの今の悩み事♪」

背後から声がした。

僕は腰の剣を抜き放ち、立ち上がって声の主の首元に突き付ける。

「わ、わわっ！？」

それは少女だった。僕と同じくらいの歳みたいで目の高さが同じだった。

「うぅ～、怖いから止めてよぉ～。」

彼女の目には一粒涙が溜まっていた。

「リア殿、そのぐらいにしてやってほしい。ティアも、脅かすような真似をするから。」

「はい……ごめんなさい……」

「いや、こちらこそごめんね……」

彼女が悲しそうな顔をしたのを見ると、少し自己嫌悪。すると彼女は急に微笑んだ。

「君っていい人間なんだね。君なら、お友達になれそうだな。」

「確かに、彼は他の人間とは何か違う雰囲気がある。親しみやすいというか、何というか……」

「実は、人間じゃなかったりして。」

――ドクンッ。

「……どうしたの？」

「いや、ちょっとね……」

動揺、した。彼女の冗談混じりのその言葉に。

（人間じゃない、か。ハハッ。何でこんなにも動揺しているんだろ……？）

もしかしたら、本当に僕は人じゃないのかもしれない。

そう思った事もある。実際、今も少しそう思っている。でも……

（それなら、今ここに人間として存在している僕はどうなるんだ！？）

「少し、外に出てきます……。少ししたら、戻ってきます……。」

そう言い残し、頭を右手で抱えながら僕は外へと出た。

幹の壁にもたれかかり、そして大きく息を吸い込み、吐き出す。空気が綺麗だと思った。

多少、目の前の景色が霞んでいた。

せっかく綺麗で雄大な景色なのに。

もったいない。なんか頭だけでなく目も熱く感じた。

「……ふぅ。」

落ち着いてきた。
多分、もう大丈夫。
スッキリはしないけど、我慢ぐらいはしよう。二人を待たせちゃいけないし。

部屋の中に入ろうと、幹に空いた穴に入っていこうとした時だった。

バキバキッ、という木々が倒れていく大きな音が聞こえた。
僕は振り返り、周りの森々を見渡す。

「あれは……！？」

先程までの話に出てきていた話題である竜が、その向く先にいた。

人と魔族と獣人と竜と・後（後書き）

日本一ソフトウェア、万歳！永遠のアセリアが４月２８日発売（のハズ）です！無条件で買い～！っても日本一ソフトウェアの作品は携帯のアプリのマール体験版しかやったことありませんが。だからアセリアが初日本一（どーいう言葉だ）になる予定ですね。ゲームのシナリオライターって格好イイと思うのは俺だけでしょうか？最近のロープレとかはグラフィックなどに力入れすぎて、なんかストーリーが微妙なのが増えてきたような……。リバースはどうなんだろ？借りるの待ちだからなぁ……。シンフォニアはキャラがよかった。特にプレセアとゼロス君が。うん

かってない闘い

僕は走った。
あの竜の下へ。
理由はない。ただ、思ったから動いた。竜を目の前で見ろ。感覚のレベルだった。
「ハァ、ハァ。」
地響きする地面を踏みしめ走る。
走る。遠くの小さかった竜の姿がどんどん大きくなっていくにつれ、地響きも大きくなっていく。
「ハァ、ハァ。」
竜はどうやら獣人達の村へ向かっているらしい。
そこに続く、広い広場で僕と竜は対峙した。
「これが……竜……！？」
圧巻、だった。
自分が豆粒にも思える程の大きな巨体。
自分に恐怖を抱かさせる様な出で立ちと、その赤い眼光。
「グオオォォォァッッ！！」
そして、空気が震える程の咆こう。
（――来るっ！）剣を構える。
ジークから教えてもらった構え。
自分よりも強い相手に対しての、静の構え。
（あれだけデカいんだ。
動きのモーションもデカいはず……！？）思考が止まる。
気付けば体が吹っ飛んでいた。
木に体を打ち付けた。大きな衝撃が今になって感じられた。
「カ…ハッ……！！」
尾によって吹き飛ばされたらしい。
疾すぎて、目に見えなかった。

（何本かイッたか……！？クソッ……！！）体の状態を確かめる。動ける。闘える！決意を新たに、ふらつきながらも立ち上がった時、何処かから声が聞こえた。
「人間っ！退け！！」
僕の方に駆けてくる影があった。いや、正しくは竜に向かって。
「オオォォッッ！！」
その影は、オオカミだった。竜に飛び付き、あの硬そうな体に噛み付いた。
「グゥゥゥッ！？」
竜は苦悶の表情を浮かべ、暴れ回った。オオカミは地に降り立ち僕の方へ来た。
「何をしている！？早く退けっ！！」

「オオカミが……喋った！？」

「そんな事はどうでもいい！退かなければ死ぬぞ！それでもいいのかっ！？」

「……死なないさ。」
オオカミに、僕はそう言い放った。
自分でも何故こんなことを言ったのかわからない。
「僕は……負けない。」
僕の本能が、そう言っていたからなのかもしれない。
「そうか……なら手を貸せ。我はコイツを止めねばならん。今は少しでも手勢が欲しい。」
オオカミはキッと竜を見た。睨むかのように。
「……君の名前は？」

「何故、名を聞く？このような状況で？」

「戦いを共にする相手の名前ぐらい、知っておくのは礼儀だとある人から言われたものでね。」
「フン。我が唯一、心を許した人間も同じ事を言っていたな。我が名はフォルテ。汝が名は？」
「僕の名前はリア。リア・ハルスレット。……ただの人間の剣士だ。」
「……っ！フッ。行くぞ！汝の命の保障はせぬからなっ！！」
僕達は竜に向かっていった。
フォルテは右に。僕は左に。それぞれ左右から攻めかかる。
「リア！背中に寄生している甲殻虫を狙え！あれが全ての元凶だ！！」
「あ、ああ……。でも何でそんな事を……」
「それは後で言う！今はコイツを……ヴェズインを助けるんだ！！」
フォルテが叫ぶ。
ヴェズイン、それがこの竜の名前らしい。
僕はヴェズインの背後にまわった。
フォルテの言った通り、ヴェズインの背には何か虫のようなモノが取りついていた。
「キチ、キチチッ……」
その虫は嘲笑っているみたいだった。……見ているだけでムカついてくる。
「ハァッ！」
虫を突き刺すために剣を振り上げる。
「右だっ、リア！」
尾が横薙ぎに向かってくる。とっさに剣を下げ、その尾撃を防ぐ。

「くぅっ！！」
やはり力の差がありすぎる。軽く仰け反る。そして尾の追撃が僕を襲う。
「バカがっ！クッ……！」
フォルテが僕を助けるために、尾に噛み付く。
「ガァァァァッ！！」
フォルテの助けによってなんとか切り抜けられたが、今度はフォルテが危ない。
尾に噛み付いたまま振り回されている。
「フォルテ！」

「いいから汝はその虫を倒す事にだけ集中しろ！今からスキを作る！」
フォルテは地に降り立ち、なにやら呪文のようなものを唱えた。
「エル、オル、レイゼ、グランディス。」
フォルテが何やら呪文のような言葉を連ねる。すると地面が隆起した。
「ゲイン、オルガ！！」
大地が触手のように伸び、ヴェズインの体の自由を奪う。
「今のは……魔術！？そうか……！」
これで何故彼が言葉を喋る事ができるのかわかった気がする。

……彼は魔族だ。
しかも、とびきり能力の高い上級の者だ。

「今だ、リア！」

「うん！」

僕は再び、あの虫に向けて剣を突き付けようとした。

今度こそ、のハズだった。

「キキキキキッ。」

虫が奇声を発し、その緑色に妖しく光る目を開いた。

その虫の脚が伸び、僕の胸を鎧ごと貫く。

「えっ――」

目の前には嘲笑う虫がいた。
頭の中がどんどん真っ白になっていく。
死に近づいている。
それがわかる。景色が、音が、感覚が。全てが無くなっていく――

かってない闘い（後書き）

キャー！リアがぁー！……はい、久々の更新？です。ここで切る予定ではなかとでした。さすがに課題がしんどいです。冬休みが嫌いになりそうです。んじゃま、残り半分を越えたグラディエイターをよろしくぅ！

ALTER

（目覚めろ……）声に応えるかのように、僕は目を開けた。
そこはいつか見た、暗闇の空間。光の無い、宇宙の果ての様な場所。
「確か、僕は胸を突き刺されて……。そうか……これが死んだ後の光景か……。案外、僕は先に見ていたんだな。」

「死んだ訳では無い。」
僕と同じ声。
しかし何か威厳に満ちた声が聞こえた。
声のした方を向く。暗闇から、人の姿が現われる。
「仮死に近い状況と言えようか。この体に眠る力によって、死にはまだ死に至ってはいない。」

「僕と同じ姿……！？」
ここまでくると、悪い冗談だ。
だが、不思議と怒りの感情はこない。むしろ清々しさがある。
「今度は否定しないのだな。まあ、今まではかなり歪んだ接し方をしていたからな。」

「おかげで僕はずいぶん苦しんだよ。」
皮肉さえも言える余裕さえあった。
「そうか……。ごめんね。」
急に話し方が変わった。あの威厳に満ちたモノではなく、僕と同じモノに。
「でも君には受け入れてもらわなきゃならない。僕を……＞アルター＜としての力を。」

「＞アルター＜……？」

「人を越えた存在。その力は、神にも悪魔にも劣らないと言われているよ。そして歴史から抹消された、禁じられた存在だともね。」
淡々と話続ける、もう一人の自分。
「受け入れてくれないか？僕を。＞アルター＜を。」

「……イヤだ。」

僕は否定した。

「何故？」

「当然だろ？恐いんだよ！あの姿になるのが！化け物になるのが！＞アルター＜だって？僕はそんなのじゃない！僕は人間だ！！」

胸に溜まっているものを吐き出すように、叫ぶように、僕は大声でそう言った。

「そう……だよね。」

目の前の僕が、僕を抱き締めた。
暖かさと冷たさを合わせたような、不思議な感覚が僕を包んだ。
「そう思うのも当然だ。けどね、これだけはわかって欲しい。僕は君だ。受け入れたくないのなら、せめて触れて欲しい。今みたいに。」
「……勘違いしないでくれ。僕は君を認めない。」
「……」
「だけど君を受け入れようとしなきゃ、何も始まらないみたいだ。」
「リア……！？」
「だから……力を貸してくれ、＞アルター＜。君の事をよく知る為に、今は君を受け入れる。」
もう一つの自分の体を抱き返す。ちょうど、抱き合った様な状態になる。
「わかった、リア。じゃあ戻ろうか、君の世界に。今度は君を恐がらせたりしないからね。」
僕達の体が光に包まれる。
優しい光だった。そこから消えてゆく僕達。――そして僕は目を覚ました。

ALTER（後書き）

リアの精神世界でのお話です。わかるとは思いますが、一応念のため。ここでリアの秘密が出ましたね～。話が飛んでますね～。ごめんなさいですぬ～。ですぬ～ってなんじゃい！？……はい、変なテンションの俺でした

一件落着！？

「リア！無事かっ！？」
声が聞こえる。
確か、この声はフォルテのモノだ。
僕は起き上がり、フォルテの方を見た。さっきのは夢だったのか？
「無事のようだな。汝をここまで連れてくるのに苦労した。あと治癒魔術を施しておいた。なんとか助かったようだな。」

「ありがとう、フォルテ。」
笑顔でフォルテにそう言った。
……なんだかフォルテの青と白の毛で覆われた顔が赤いような気がする。
「スマンな。知らなかったものだから……」

「知らなかったって何が？」
僕が聞くとフォルテはビックリした様子で僕を見た。
「き、聞こえたのかっ！？」
フォルテが慌てる。
なんか何処かシオンに似ているなぁ～とか思う。
なんてゆーか、シリアスな時とくだけた感じの時のギャップが。
「何でもないっ！それよりも……」

「そうだっ！竜は！？」
話の鼻を折って、僕はヴェズインの事を聞いた。
「……ヴェズインは獣人の所へ向かっている。今から追い掛ければ何とかなるとは思うが……」

「なら行こう！早くしなきゃ大変な事になる！」

「ならん！汝はそこでじっとしていろ！脱がした鎧はそこにある。自分の身ぐらい守れるだろう？ヴェズインは我一人で片をつける！！」
フォルテはそう言うと、森の中を駆け抜けていった。
「何だよ、フォルテのやつ……？」
『リア、聞こえる？』頭の中に声が響く。
僕と同じ声だ。……さっき見ていたのはどうやら夢じゃないらしい。
「君は……＞アルター＜かい？」
『別に声に出さなくても念じるだけで僕と話せるよ。
……リア。彼を追い掛けよう。竜相手に魔族一人では勝ち目は無いよ。』
「言われなくてもそうするよ！」
僕は地面に転がった鎧を手にして、森の中を走った。
『鎧はもう使い物にならないから捨てなよ。服も穴が開いてるみたいだし。』
「あ……ホントだ。しかも包帯が巻かれてる。フォルテがやってくれたのかな？」
『さあね。
それよりいつまで声に出してるの？知らない人が見ればただの変人だと思われるよ。』
「うるさいな～、こんなの初めてだからよくわからないんだよ～！」
僕は＞アルター＜と喋りながら走っていた。
そういや、こんなにも気兼ねなく人と話すのも久しぶりだ。
僕は＞アルター＜と話せるようになって何か変わったのかな？
「ね……＞アルター＜？」
『また声に出してる……。まあいいや。何？』
「僕は……変わったかな？」
『変わったよ。少なくとも……凶気で僕の力を使っていた時と比べるとね。』

「そっか。」
それからは一言も＞アルター＜とは話さなかった。
聞きたい事は他にもいっぱいあったが、何故か聞く気にならなかった。
「……っと、ここだね。」
フォルテがいた。ヴェズインがいた。そしてオロドにガロンもいた。
「リア殿っ！」

「何っ！？リアだって？」
オロドの言葉に驚くように、フォルテはヴェズインと闘っているのにも関わらず僕の方を見た。
「フォルテ！後ろ！」

「なっ！？ぐぅっ！」
フォルテの体に強烈な尾撃が炸裂する。
フォルテは吹き飛ばされ、こちらに飛んでくる。
「大丈夫、フォルテ？」

「ぐ……！何故来た！？このバカ者が！！」

「バカはないだろう？助けに来たってのに。」

「助けに、だと？汝はさっき、死にかけたのを忘れたのか！？」
痛いトコを突くなぁ。
確かに僕は胸を突き刺されたけどさ。放っておいても死ななかったワケなんだし。
「うるさいな。君はここで見ておきなよ。ヴェズインは僕が助けるからさ。」
僕は一歩前に出て、ヴェズインを見上げた。
「ヴェズイン。いい子だから、じっとしてくれ……ないよね、やっ

ぱ。」
次に剣を抜き放ち、構える。『さあ行こうか、リア？』
「……あの悪魔のような姿になるの？」
『もう、あのような姿にはならないよ。
君が、僕を、受け入れようとしてくれちいるからね。』
「……ていうことは、あの悪魔のような姿って……？」
『君の僕に対する認めたくないっていう反発心からきたモノだよ。』
「……反省します。」
僕の体が光に包まれる。
＞アルター＜と抱き合っていた時に包まれた、青白い、暖かい光。
『行くよっ！』
「うん！」
どうやら自分の姿が変わったらしい。
そんな事は気にせずに疾走した。
体が軽い。背中に羽根が生えてるみたいだ。実際生えてるんだけど。
『イメージとしては”青空”っていう感じにしたんだけど、どうかな？』
「そんなの今見ている暇ないっ！！」
『わかったよ～。
あとで絶対、感想言ってよ～？』僕は背中にある羽根を使い、空を舞う。
飛び方を知らないのに空を飛べるなんて、なんか不思議な感じだ。
後ろに回りこむのには少し手間取る。
ヴェズインの尾によってそれが困難になっていた。
「あの尾撃さえ何とかなれば……！」
かと言って、正面で様子見をしていれば……
「……火球か！」
回りこめれば、勝機が見える。
回りこめれば……。
そう思っている内に火球の群が近づく。

『リア。
』＞アルター＜の声だ。
『剣を横一線に振って。
少し考えがある。それに、その後にあの竜に一瞬のスキが生まれるハズだから。』
「わ、わかった！」
＞アルター＜の言われるままに、僕は剣を横に振った。
「えっ……！？」
僕は驚いた。
衝撃波が、振ると同時に発生したからだ。
その衝撃波は火球の群れをかき消し、そしてヴェズインをひるませた。
「グゥゥゥゥッ！！」
『今だ、リア！』
「オォォォォッ！」
ヴェズインの背後――あの甲殻虫のいる背中に、今できる最高の速度で飛んでいった。
「キチキチ……」

「また会ったね……。もう見たくもなかったけど。」
僕は剣先を虫に向けたまま、腕を引いた。
「キシャーー！！」
たが、あの時のように虫は足を、今度は何本も伸ばしてきた。
「二度もくらってたまるか！」
体を一回転させながら足を切り落とす。
一本、二本、三本、次々に落ちていく虫の足。
剣を突き出したまま、僕は虫を突き刺した。
「ギ、ギギャ……ギャ……」

「もう、終わりだ……！」

剣を引き抜く。剣についた緑色の血を振り払い、鞘に収める。
「ガ……ギ……」

虫がボロボロと崩れ落ち、やがて風化していった。

「ふう……。やっと終わっ……た……。」

体中から力が抜けていくような感じを覚えながら、どんどんと意識が薄れていき、やがて僕は気を失った。

（なんか最近、気を失ってばっかりだな……）

そう、思いながら。

一件落着！？（後書き）

最近、カフェオレ飲んでね～な～。ハイ、スペクトラルソウルズをプレイ中の蒼月朱空です。とりあえず、この作品を終わらせる気でガンバリ中なのですが、書いた後に物足りなさが。特にバトルの部分が。文字や文章で表すのってかなりムズいですな。ってなワケで誰かバトルシーンが得意な方、オラに元気を！……じゃなくてアドバイスを！

↓目覚め↓説明

「……」
起きた所は、何処かの部屋のベッドの上だった。また、気を失っていたのだ。
「……ねえ、＞アルター＜？」
『なんだい？』
「君はずっと起きてたの？」
『もしかして、僕が君の体を勝手に使うと思った？』
「……多少。」
『あ、ヒドイなー。でも安心して。僕にはそんな事はできないから。』
「ふーん……。じゃ、あれは何？」
僕が寝るベッドのそばにあるテーブル。
その上には果物の入ったカゴと、果物の皮や芯が。
「……食べただろ？」
『やだなー。そんな事……あるけど。』
「ハァ……。これじゃ、うかうか寝てられないな。気をつけよう。」
『しょうがないじゃんか。
お腹すいてたんだし。』＞アルター＜はすねるように言った。
「全く……。ん？」
呆れていると、コンコンというドアを叩く音が聞こえた。部屋のドアが開く。
「大丈夫か、リア！？」
慌てた様子でシオンが入ってくる。『あ、シオンさんだ。』
「ちょっと待って！何で君がシオンの事を知ってるの！？」
「オ、オイ！急に誰と話してるんだ！？」

「あ……！」
『知～らないっと。
『＞アルター＜はまるで狙っていたような物言いだった。
「な、何でもないよ。」
僕は誤魔化した。
疑いの目がまだ残っていたが、何とかなったみたいだ。
……本当かな？（で、何でシオンの事を知ってるの？）『君の知っている事は全部知ってるよ。
今まで君の中にいたんだから。
『（……！？ていう事は……！）『そう。
君がジークを……』（わ～！それ以上は言うなぁ！！）僕は少しパニくった。
全部知ってるって事は、僕のあんな事やこんな事まで……『そ♪君が人に言えないような事まで知ってるよ。』
「うわぁ～！このバカぁ～！！」
暴れた、暴れた、暴れた。
座っていた椅子を吹き飛ばし、果物をヤケ食いし、ベットにダイブした。
「ど、どうした！？」
シオンが心配して僕に寄ってきた。
「なんか今日のお前変だぞ！？何処かで頭を打ったのか？」

「うぅ～。シオン～。」
ああ……僕はもう終わりだ……。
これじゃ、僕の恥ずかしい事が世の中に……

『大丈夫だよ。
ちょっと動揺しすぎ、リア。僕は誰にも言わない……ってか言えないから。』

（信用できないな……）

『あ、そんな事を言うんだ。なら言っちゃうよ？僕は本当は……』

（言えるんじゃないか！？）

まあ、しばらく僕と＞アルター＜の口論（？）は続いたのだけども。その間、シオンは変なモノを見るようにこっちを見ていたような気がする。

「入りますぞ。リア殿。」

コンコンとドアの叩く音が鳴る。この声は確かオロドだ。

「どうぞ。」

ドアが開き、そこからオロドが……と思ったら、オロドだけでなくガロン、それにフォルテ、知らない女の人もいた。

「リアさん……でしたね？」

「は、はい。そうですけど、あなたは……？」

「私はキセラと言います。シオンと一緒に私を探しに来てくれたんでしたね？ありがとうございます。」

「い、いえ！僕は何もしていないですよ。礼ならシオンに言って下さい。」

「もう俺は言われたよ。」

隣にいるシオンが、そう言った。

「……リア、どうやら元気そうだな。何よりだ。」

フォルテが僕の方に歩いてきた。
僕が腰掛けているベッドの上に飛び乗り、僕にその鼻を寄せる。

「フ、フォルテ！？」

ちょっとくすぐったい。
フォルテはクンクンと匂いを嗅いでくる。
こうしているフォルテが、なんか犬みたいで可愛いなぁ～とか思う。
ギュッとしたらフカフカで気持ちいいんだろうなぁ～

「……やはり。」

フォルテが一言、小さくそうつぶやいた。
フォルテを見てぽわーとしていた僕は、それにちょっと驚く。

「汝からは、今までに匂ったことのない匂いがする。確かに人の匂いはするが、それとは別に人とも、魔族とも、獣人とも、ましてや竜の匂いでもない。あの姿を見た時に思ったが、汝は一体……」

「そうじゃ。リア殿、オヌシは一体……」

フォルテが、オロドが聞いてくる。
シオンやキセラさんまでもが無言でこちらを向いていた。

『リア……』

「そうだね。みんな、今から全てを話す。僕が過去にジークと会う前の事。そして、僕の中にいる＞アルター＜の事……！」

『後者の方は僕が話すよ。君にも言わなきゃならない事があるからね。』

（頼んだよ、＞アルター＜。）

『頼まれた！』

みんなが、僕の方を見る。
聞く態勢になっているようだ。僕も話す態勢に入る。

「それじゃあ先ず、過去にあった事を話すよ。僕は……」

↓目覚め↓説明（後書き）

腹痛い～。ハイ、蒼月朱空の後書きタイムです。この後書きを書いている今日は始業式の早朝です。宿題終わってません。つーか宿題が何かわかりません。載っている紙が無いんです。更には課題さえ終わってません。絶体絶命です。今日あたり死ぬかも。いや、キツイよ？ダブるかもよ？半端ないよ？だが、やってしまうのが人間さ！小説を書くのが俺の初期衝動さ！自分でバカだと認識してるあたり、どうなんだろう？……こんなバカな後書きでも楽しんでもらえると、コーエイです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0456a/

グラディエイター

2010年11月24日05時35分発行